

平成 26 年度亀田図書館文化講演会

「俳句の味わい（「おくのほそ道」より）」  
～ドナルド・キーンの視点を踏まえて～

講師 西 沢 翔 氏

（「ドナルド・キーン・センター柏崎」ボランティアスタッフ）

講演会記録集

新潟市立亀田図書館

■ 平成26年度 亀田図書館文化講演会

日時 平成26年11月9日（日）午後2時～

会場 江南区文化会館多目的ルーム1・2

# 「俳句の味わい（「おくのほそ道」より）」

～ドナルド・キーンの視点を踏まえて～

講師 西 沢 翔 氏

（「ドナルド・キーン・センター柏崎」ボランティアスタッフ）



## 目次

### 講演会

はじめに（「序章」）	1
第1章 ドナルド・キーン先生について	3
第2章 なぜ「松尾芭蕉」なのか？	5
第3章 「おくのほそ道」について	12
第4章 「おくのほそ道」でとくに知られる名句から	16
第5章 「おくのほそ道」での「越後路」	19
第6章 不易流行とかるみ	22
まとめとして（「最終章」）	24
巻末資料	26

## 【講演会】

### はじめに（「序章」）

ただ今、ご紹介頂きました西沢です。もしも、NHK連続テレビ小説の「花子とアン」のお父さんであれば、「グッドアフタヌーン エブリバディ」と言うのではないかと思います。私はフリーランスでありますけれども、実は非常に強い思いがありまして、「ひとりでも多くの英語好きを創りたい」ということで、できるだけたくさんの活動をさせて頂いております。本日は貴重なお時間を割いて頂いて、非常にありがたく思っております。

活動としては、社会教育、生涯教育という視点で試行錯誤を繰り返しながら、英語そのもの、あるいは英語圏の異文化にまつわるさまざまな活動を、学校の内と外で試みております。その活動の中で、昨年秋に柏崎市の市役所近くに開館しました、「ドナルド・キーン・センター柏崎」では、館内ボランティアをさせて頂いております。全国から来館される多くのお客様たちを、私どもは「ゲスト」と呼んで、温かくお迎えしています。少しでも、ご来館の皆さんへの文化的な面でお役に立てれば…と思っております。また、今日のように、「ドナルド・キーン・センター柏崎」の設立の趣旨や、キーン先生の偉大な業績を広く伝えるメッセンジャー、あるいは伝道師といった立場でも、いろいろなイベントに参加したりしております。そんな役回りもさせて頂いているわけですが、日本文学研究の世界的権威でいらっしゃるドナルド・キーン先生が、今の世の中はもちろん、後世に伝えたい大事なことを、できるだけ分かりやすく、できれば多くの人たちに分かち合ってもらえれば…と願っております。

なお、個人的な活動としましては、「徒然草」の吉田兼好のように、心に浮かんでくることを思うままにエッセイに書き綴って、ふさわしい機会があれば発表もしています。今もご紹介にありましたが、特に英語情報月刊誌「イングリッシュジャーナル」、今店頭にあるものはこういうものですが、その5ページにありがたいことに、私のエッセイ（「エイゴのころ」）が絵とともに載っておりますので、関心のある方は書店で手に取ってみてください。全国の英語好きの皆さんにこのエッセイをお読み頂いて、それなりにお役に立っているようで、これもとてもありがたいことで3年目に入ります。

また、この10月から来年の3月まで、NHK新潟放送局「新潟ラジオセンター・朝の随想」で、水曜日の放送を担当しております。ここでは、英語はもちろん日本語も含めて、言葉そのものの魅力や異文化の面白さや意外さをご紹介します。ぜひ毎週水曜日朝7時40分からの「新潟ラジオセンター・朝の随想」をお聞き頂ければと思います。また、パソコンをお使いになられる方は、ネット検索でNHK新潟放送局「新潟ラジオセンター・朝の随想」にアクセスして頂きますと、最新のもの、この前の水曜日の放送をお聞きになれます。

亀田図書館の横山館長からお伺いしたところによりますと、亀田は「俳句の里」ということで、とりわけ俳句をお作りになることへの造詣が深い、熱心な方々が大勢いらっしゃると伺っております。極めて文化レベルの高い土地柄ということで、今日のこの会が催されております。地元の俳句愛好家の皆さんによって、何世代にもわたって定期的に句会が催されていると伺っています。また、誰もが知る著名な俳人をお招きになって、ご指導を仰いでいるとも聞いております。その句作の成果として、立派な句集もこれまでたくさん発行されているということで、亀田図書館2階に展示してあるおびたしい蔵書を拝見させて頂きました。極めて貴重な、大正時代や昭和初期の歴史に残る俳句の専門誌「ホトトギス」もたくさん所蔵しており、大変驚きました。まだご覧になってない方は、後ほど図書館の2階の俳句コーナーをご覧になってみてください。俳句を鑑賞する立場の者のひとりとして、亀田の皆さんの俳句への熱意や強い思いと高い教養、長年の高尚な活動としての句会の継続に対しまして、まず心から敬意を表したいと思います。

お手元の資料にあるものをはじめ、亀田地区には句碑も数多くあります。私自身は確かにたくさんのエッセイを書くのですけれども、言葉を結構用います。心からの思いや感動、感激をコンパクトに、わずか17文字で簡潔に凝縮された俳句を作ることなどは、私にはとてもできません。そういった点からも、数多くの見事な粹で奥深い句を、簡潔に凝縮し作られている皆さんの活動には畏れ多く、とうてい足下にも及びません。

そういったことで、今日は俳句を鑑賞する側のひとりとして、謙虚にお話をしてみたいと思いますので、その点をあらかじめお許し頂ければと思います。

とりわけ、ドナルド・キーン先生の偉大かつ膨大な著作の中から、日本が誇る古典の紀行文学で、若きキーン先生をすっかり魅了した「おくのほそ道」に出てくる俳句の世界をご紹介します。皆さんと一緒にひと時を楽しみたいと思っております。とは言いましても、芭蕉俳句の緻密で理論的な研究論文のような、お堅いものではありません。現在は日本人にられました。元はアメリカ人のドナルド・キーン先生の視点から「おくのほそ道」を見るとこうなるということで、生粋の日本人からすれば、ともすれば思いがけなく興味深い視座を交えながら、お話を進めていきたいと思っております。少しだけ専門的になるかもしれませんが、キーン先生が英訳された芭蕉の俳句のいくつかを、さわりだけ触れて味わってみたいと思います。

ずいぶん前置きが長くなりましたけれども、今日は一冊の本の構成を真似てお話をしてみます。ここまでが、いわば「序章」ということです。

皆さんのお手元にも配付物がいっていると思いますが、第1章「ドナルド・キーン先生について」からお話をしてみたいと思います。

## 第1章 ドナルド・キーン先生について

キーン先生は、1922年、大正12年にアメリカ・ニューヨーク市ブルックリンでお生まれになりました。現在、年齢92歳で、目下、「評伝・石川啄木」を執筆中です。「これが私の最後の作品ではありません」と、先月13日の柏崎市での講演で力強くおっしゃっていましたから、まだまだ執筆への意欲は衰えを知りません。幼いころから極めて優秀なお子さんだったということで、いわゆる「飛び級」を繰り返しまして、なんと16歳でコロンビア大学に入学します。日本では高校1年生です。このころの甘いマスクのキーン先生のお写真が、お手元の資料にあります。これは、「ドナルド・キーン・センター柏崎」常設展示の図録からの引用です。こういう図録があるのですが、とてもよくまとまっているものですので、もし「キーン・センター」へ行かれたら、ぜひお求めいただきたいと思います。



1939年に、第二次世界大戦が勃発します。日々激しくなる戦争に恐れおののいて不安が募っているころ、キーン青年は、タイムズ・スクエアの古本屋さんの店先に積んで売られていたアーサー・ウェイリー英訳「源氏物語」“*The Tale of Genji*”を、たまたま手に取ります。値段がわずか49セントで安かったこともあり、さしたる思いもなく購入します。

さっそく読んでみると、その中で描かれているのは、嫌な戦争とは無縁の平和で夢のような雅（みやび）の世界。思わずどんどん引き込まれていったそうです。戦争はあくまでも人殺しの世界です。しかし、「源氏物語」が描く人間模様の世界には、人生ではいかんともしがたい人の死の描写はいくつかあっても、残忍な人殺しは一切ありません。美しい王朝絵巻の想像の世界は、生まれながらにして平和を尊ぶキーン少年の心と感性に、大きくインスピレーションを与えたのです。

この「源氏物語」との偶然の出会いが、ドナルド・キーン青年の、その後の人生を決定づけたというわけです。この偶然も、今にして思えば必然だったのかもしれない。

太平洋戦争中、キーン青年は、アメリカ国民の義務として、やむなく兵役につきます。ただし、戦場ではなくて、希望して海軍語学将校としてハワイへ派遣されます。そこで敵国語であった日本語を学び、アメリカ軍が入手した日本軍に関する書類の翻訳や日本兵の日記の解説、日本兵捕虜の尋問や通訳などに携わります。戦争中、軍関係の機密が漏れる可能性がありますので、アメリカ軍兵士は日記を書くことは禁じられていました。一方、日本兵は

手帳などに戦地での自分の思いを、日記として書き留めることが普通でした。キーン将校は、そういった日本兵たちの日記を数多く解読していたわけです。そういった戦時中の業務が、若きキーン将校の心の中に、日本という長い歴史ある国の不思議な魅力のようなものを、醸し出していったのも事実でしょう。

皆さんのお手元の資料に、戦時中のキーン将校の写真（最右）があります。これは、館内のキーン先生の年譜にもあるものです。武器のカービン銃を抱えてはいますが、よく見ますと、左腕には大英和辞典をしっかりと抱えているのです。実にいい笑顔ですね。これは、キーン将校のその後の現在に至る日本文学研究の偉大で膨大な業績の数々を、はからずも暗示しているのだと思います。また、平和を願う一人の人間としての、覚悟のようなものをその写真から見てとれます。

ここで若干、私とキーン先生の接点についてお話しさせて下さい。私は、明治大学文学部の英文科で学んだのですが、実は卒論のテーマに困っていました。そこで、すでに研究つくされているありきたりな英米の作家やその作品を選ばず、どういうわけか「源氏物語」の英訳、“*The Tale of Genji*”を題材としました。当時、出版されたばかりで大きな話題になっていたサイデン・ステッカー先生の英訳や、キーン先生をとりこにしたアーサー・ウエイリー英訳の「源氏物語」を、(岩波文庫の)原文と併せて取り組んで卒論を書きました。

このあたりが私とキーン先生の接点といえましょう。ですが、かろうじて締め切りに間にあって仕上げた私の卒論なんてものは、とても拙いものでしかなかったのです。「源氏物語」の特徴といわれる言い回し、「あはれ」あるいは「もののあはれ」、そういったものがどのように英訳されているかといった、拙劣なものでしかなかったのです。

ただ、自分の思いとしては、日本の古典文学が描く世界が自分の感性に合っているのか、なぜか引き込まれたのです。学生や生徒の頃には、「枕草子」、「徒然草」、「伊勢物語」、「おくのほそ道」などを、自分で買ってきて読んでいました。よく学校で習う堅苦しい古典文法などはそっちのけで、古典文学がほんわかと醸し出す、あの言いようもない魅力ある風情や風流を、意味もなくただ味わっていただけだったと思います。さらに、古文そのものや、和歌や俳句にあるような、五・七・五の韻律や独特の言い回しが、なぜか心地よかったです。ですから、大学生時代の東京生活では、ドナルド・キーン先生の講演会も何度か拝聴しましたし、キーン先生の本などの資料や新聞記事も、興味を持って結構読んでいました。また、講演のカセットテープも購入したりしていました。運命の廻りあわせと言いますか、はるか時空を超えてありがたいご縁が生まれまして、今こうしてキーン先生にまつわるお話をさせて頂いているわけですから、人生は非常に不思議だと思えます。

## 第2章 なぜ「松尾芭蕉」なのか？

第2章にまいります。「なぜ松尾芭蕉なのか？」今では、俳聖として特別の敬意を持って称されている「松尾芭蕉」ですので、どうも呼び捨てでは、さすがに畏れ多いように思います。とはいえ、「松尾芭蕉先生」というのもどうもしっくりきません。「松尾芭蕉さん」というと、なにかお友達みたいですよ。もともと俳会の宗匠、すなわち師匠でした。そこで、師匠の「師」をつけまして、これからのお話の中では「松尾芭蕉師」、または「芭蕉師」と呼ばせて頂きます。

私が中学生、高校生のころ、古典の授業で「おくのほそ道」を習ったときに、なぜ俳号が「芭蕉」なのだろうと、不思議に思っていました。そもそも「バショウ」というのは、沖縄や奄美あたりでよく見かけられる南国の植物です。簡単に言うと、バナナの木の仲間です。木とはいっても、実際は大ぶりの草です。実は、本物を持って来たのですけれども、水をやるのを忘れてしなびてしまいましたが、これが「バショウ」です。しなびたせいか、(葉っぱが) ばらばらになってしまいましたが、実はここに、芭蕉師が心奪われた秘密があるようです。



「松尾芭蕉師誕生」までのエピソードをお話してみます。

芭蕉師は、今から 376 年前の 1644 年に、今の三重県伊賀上野に生まれました。身分こそ下級武士でしたが、実際には農業をしながら貧しく暮らしていました。そんな日常のつらさを紛らわせてくれたのは、そのころ流行り始めていた俳諧です。俳諧の集まりでは参加者はみな俳号を用いて、武家でも町人でも農民でも、当時厳しかったはずの士農工商という身分の区別などまったく関係のない、純粋な言葉遊びの楽しい世界でした。おそらく青年・松尾芭蕉師には、堅苦しさを息苦しさをない心の自由を感じられて、ことのほか居心地がよかったものと思われます。縁あって 19 歳で士官した先で、その若君で俳号を「蟬吟(せんぎん)」いう、お殿様の息子なのですが、そこから本格的な京都仕込みの、貞門派の俳諧の手ほどきを受けます。本名が松尾宗房(むねふさ)でしたから、当時の俳号を「宗房(そうぼう)」としていました。実際に俳句をやっていくにつれて、宗房はますます俳諧の世界にのめり込みます。そして、「ごく若いころから心をつかんで離さないほど俳諧が好きになった」という古い記述があると、以前、放送されたNHKテレビの番組、「その時歴史が動いた」で紹介さ

れていました。

ここで、私どもはひとつ認識しておかなければなりません。我々がよく見聞きして口にする「俳句」とは、明治時代になってから正岡子規が命名して広まり定着した用語です。ですから、松尾芭蕉師が生きていた江戸時代には、「連歌や俳諧」でした。俳諧というのは、その席に集まっていた参加者が次々に句を作ってつなげていくという、あくまでもたわいのない言葉遊びなのです。もっとはっきり言えば、一座の笑いを取ったりする、ざれ言の掛け詞（ことば）や駄洒落（だじゃれ）の連続というわけです。

この俳諧の詠み始めの五・七・五の発句（ほっく）、これを今では独立した文芸作品の「俳句」としているわけです。俳諧というのはしよせんお遊びですから、和歌などのように優雅で気品のある文学とか芸術とかというカテゴリーのものではなかったのです。とはいえ、格式を重んじる貞門派の俳諧には、万葉集やよく知られた和歌の知識が底流にあって、それを部分的にもじり、句にはそれなりの古典的な教養がにじみ出ているということです。

その後、俳諧をさらに極めようと思ひ立ち、松尾宗房は 29 歳で、新興都市である江戸の日本橋に移ります。しかし江戸の町では実績のかけらもない無名の宗房は、当初はあまり相手にされなかったようです。それでも、長く身に付けてきた京都風の古典的な貞門派の俳諧を、必死で門弟たちに伝えていました。そうしたとき、それまでとは異なる江戸風の俳諧のあり方に気がつきます。生活風景そのままを詠み込むという、いわば前衛的な談林派の俳諧です。古い決まりごとにはとらわれない、自由な気風の江戸の俳諧との出会いで、松尾宗房は大きなインスピレーションを受けます。そこで俳号を「桃青（とうせい）」と改めて、時には俗な下ネタまで詠み込んで、新たな俳句の流れを作り始めます。

これで思い出すのが、「おくのほそ道」の尿前（しとまえ）の関で生まれた、「蚤虱（のみしらみ）馬が尿（ばり）する 枕もと」、あるいは「蚤虱 馬の尿（しと）する 枕もと」という、思いきり俗な句が思い浮かびます。俳諧がもともと大好きで潜在能力が備わっていたわけですから、宗匠としての松尾桃青の実力は、江戸の町では順調に認められて評判となり、どんどん門弟が集まっていったようです。自分の句を評価してもらう点者としての依頼も殺到して、懐具合も豊かになり、生活もずいぶんと安定していったようです。

しかしこれは「点取り俳諧」と呼ばれ、俳諧の席で詠まれた自分の句に、良し悪しの点数を宗匠からつけてもらうものです。そのうち句の点数を巡って金銭が飛び交う、賭け事をする者まで現れる過熱ぶりに至ってしまいました。句作の純粋な喜びを汚されるような風潮に、松尾桃青は、耐え難い思いと疑問と嫌気を持ち始めたようです。「自分が生活の糧としている俳諧とは、ただの言葉遊びに過ぎないのでは…」という、真剣な人生上の迷いや苦悩も抱いていったようです。そこで、にぎやかで喧噪な日本橋をあとにし、当時は江戸のはずれで閑

静だった、深川の庵に住みます。自分なりの純粋な俳諧の、新たな世界を模索してのことだったと思います。では、どうして「芭蕉」と名乗ったのか…。私がかつて読んだ記述で、この理由を一番はっきりと書いてあるのは、なんとドナルド・キーン訳「おくのほそ道」です。このように書いてあります。

「このころ、初めて宗房（そうぼう）という俳号を名乗るようになった。当時の多くの詩人や芸術家、ひいては哲学者同様、芭蕉も生涯いくつかの雅号を利用したのである。中で最も著名である『芭蕉』という雅号は庭の木から名づけられた。1681年、江戸のややさびれた界隈（かいわい）に引っ越しをした際、庭の風景をよくするために芭蕉の木を植えたのである。芭蕉は実を結ばないバショウ科の多年生植物で、すぐに風で破れる大きな葉を持っているので、詩人の感受性の象徴であり、俳人の庭にふさわしかった。訪れる人たちは、家を『芭蕉庵』と呼ぶようになり、ほどなく芭蕉は自分をこの名で呼ぶようになった。」

キーン先生は、このように説明をしておられます。キーン先生による、実に明快な考察と筆致です。ほかの資料で知ったところでは、門弟の「李下（りか）」が松尾宗匠に芭蕉の木を贈り、それを深川の庵の庭に植えたら、ことのほかよく茂ったというのです。芭蕉の大きな葉は風に吹かれるとすぐに破れやすく、はかないものの例えでもあったようです。その芭蕉の葉の様子や特性に、自分の俳諧人生を重ね合わせたのではないのでしょうか。これまでの過去のあり方を一切捨てて、己が生まれ変わり、新しい俳諧の世界を確立したいとの思いで、「芭蕉」という俳号にしたのだと思われます。

このように芭蕉師は筋金入りの俳諧師として、ことあるごとに自分で人生の節を作って、そのたびに芭蕉師自身が進化している気がするのです。この5年後に、あの「古池や」の名句が生まれます。

私はこの夏に、「おくのほそ道」の旅で、芭蕉師も訪れた秋田県南端の象潟の蚶満（かんまん）寺を訪ねました。かつて見たこともないほど巨大な芭蕉の木があり、大きな感銘を受けました。象潟は、芭蕉師と曾良が訪れた当時は松島のような感じだったのでそうですが、それから115年後に大きな直下型の象潟大地震が起き、島々が隆起しました。



島だった数多くは、今では田んぼの中に点在するという、何とも不思議な光景を楽しめます。まだいらしていない方は、「おくのほそ道」を追体験する、お薦めの観光スポットだろうと思います。

さて、松尾芭蕉師といえば、日本人なら誰でもすぐに、「古池や 蛙飛びこむ 水のおと」を思い起こします。なんとこの有名な句碑が、江南区割野の浄願寺にあります。横山館長からご案内頂き、実際に私も拝見しました。江戸の中期に、地元の医師である青木貞庵という方が、芭蕉師に傾注して建立されたとされます。

世界中に知られているこの名句から、皆さんはそれぞれどのような情景を思い浮かべるでしょうか。おそらくおひとりおひとりが、思い思いの情景を心の中に浮かべるのではないかと、思います。きっと、無限に情景が浮かぶのだらうと思います。これこそが、「古池や」の句の神髄です。

実は、多くの人が思っているのと違って、「古池や 蛙飛びこむ 水のおと」の句では、「古池や」が、先に詠まれたものではありません。門下の「支考」が「葛の松原」という書物に、この名句誕生の秘話を書き残しています。意外かもしれませんが、芭蕉師はまず「蛙飛びこむ」、次に「水のおと」と詠みました。これは俳諧の集まりをしていたときに、実際に近くで蛙が水に飛び込んで、「ぽちゃん」と音が聞こえたのだそうです。その頃までの俳諧の伝統としては、蛙（かわず）、カエルは「鳴くもの」とされていました。すなわち、カエルとはカジカガエルのことで、真夏の清流で独特の涼しい声で鳴くのが、それまでのしきたりになっていたわけです。ですから、カエルがぴよんと躍動的に水に飛び込む、見方によっては滑稽な様子を俳諧に詠むということは、それまでの長い決まりごとと常識の壁を、芭蕉師が一気に打ち破った瞬間だったのです。

そこで、いよいよ詠み始めの五文字です。蛙（かわず）、カエルは、古来、和歌などのしきたりでは、濃い黄色の花である「山吹」に、決まったイメージが繋がったのだそうです。門弟たちは、当然、「山吹や」とくると思っていました。ところが、芭蕉師はこともあろうに、「古池や」と発したのです。これも明らかな決まりごとと常識破りです。しかも、この古池とは、芭蕉師が実際に見たものとはいえないのです。あくまでも「古池」は、想像の産物です。言い換えれば「古池」とは、芭蕉の心に浮かんだ、いかにも古そうな池という心の中の風景、「心象風景」なのです。

それまでの連歌や俳諧とは、現実に見たり聞いたりするものを詠んでいたのです。ですが、「古池や」の句では、「古池」が想像の世界なのであり、「蛙飛びこむ 水のおと」が、実際に聞こえた現実というわけです。しかも、平安時代の王朝文化のころから長く公家の間で詠まれていた和歌は、基本的には想像の世界を表現していました。陸奥（みちのく）の名所も歌枕として詠まれてはいますが、京都にいた公家が想像したものです。

すなわち芭蕉師は、心に思い描く世界と現実に見える世界を融合させた、それまでにはなかった、いってみればハイブリッドな俳諧を生み出しました。これが芭蕉ならではの工夫、

すなわち「蕉風（しょうふう）」の確立の第一歩で、「古池や」の句は、「蕉風開眼」というわけです。1686年、貞享3年、春のことです。

この「蕉風開眼」の句が生まれたのは、その前に、西国への「野ざらし紀行」の大変つらい旅をして、しきたりにとらわれず、見えたり聞こえたりすることを自由に表現するという新たなインスピレーションを得たからだともいわれます。「野ざらし」とは、なんだか聞こえがいいのですけれども、実は「どくろ、しゃれこうべ（または骸骨）」のことを言います。

古典落語でも、「野ざらし」の演目があります。この噺では、生前は絶世の美人だったけれども、今では「野ざらし」が幽霊になって、コミカルにストーリーが展開していきます。

芭蕉師は、「野ざらし紀行」というくらいですから、この9か月にわたる長旅に際して、「死」を意識していたことに間違いはありません。ひとりの人間が、本気で「死」を意識したとき、その人の心境、生き方で、それまでにはなかった、肝心な何かが変わったり生まれたりすることも、実際にはあることです。これは、決して表面的に「縁起がよくない」などというようなことではないのです。また、私にもいくつかの実体験がありますが、苦勞の多い旅というものは、人としての成長をもたらしてくれるものです。

さて、この俳諧の席に集まっていた門人の多くたちは、「古池や」のこの型破りな句ができていく過程で、一同思わず驚嘆の声を上げたといえます。

「型破り」というのは、本来の「型」をきちんと身につけている人だけが、本当にできることなのだろうと思います。芭蕉師も伝統としきたり重視の貞門派の俳諧の世界で、精進してしっかりと「型」を磨きました。

私と同年で、先年亡くなられた中村勘三郎氏は、「型をきちんと身につけていない人が型を崩しても、それは単なる『型なし』ってえんです…」と語っていました。これは、けだし名言として、私の心の中にずっと染みついています。

現代日本の私たちが、「古池や 蛙飛びこむ 水のおと」の句を、見ても聞いても、カエルがぴょんぴょん飛び跳ねている様子や、「ぽちゃん」という水の音がやかましいといった動的なイメージではなくて、逆に自然の中で、「しーん」とした静寂をなぜか感じるわけです。

これを「宇宙の静けさ」という人もいます。このあたりが、「古池や」が名句といわれるゆえんではないでしょうか。現実にある世界と想像や空想や心の世界の巧みな合わせ技といえますか、それまでにはなかった絶妙なコンビネーションこそが、芭蕉師の句風、すなわち「蕉風」の極意なのでしょう。

この「古池や」の句によって、それまでは取るに足りない言葉遊びにすぎなかった俳諧が、高尚な和歌に肩を並べてもいいような芸術や文学や文化の域まで達したということでしょう。それほど、松尾芭蕉師の「古池や」の句は、世の中の一部を進歩発展させたのです。しかも、

当時は歴史と伝統に裏打ちされた京都や大阪の人からすれば、ともすると見下されていた感のある新興の町であった江戸にも、俳諧が文化のひとつとして認知されたわけです。

こうして、誰もが当たり前だと思っている固定観念や常識というものが、勇気や気骨があって一般人とは異なる発想や行動を持った人から打ち破られたときに、社会にはそれまでにはなかった進歩や発展が成されるという、ひとつの事例ではないでしょうか。そういう人は、ともすると見方によっては、変人や奇人なのかもしれません。しかし、こういった変人や奇人の思いがけない発想や視点や行動のおかげで、それまでにはなかった斬新なことが生まれることは、数多くの歴史的な事実が証明しています。

それが、坂本竜馬の幕末期の活躍だったり、エジソンの発明の数々であったり、アインシュタインの相対性理論であったり、あるいは最近では新しい光のLEDの開発者だったりするわけです。ありきたりの常識や前例の繰り返しからは、新しいことは生まれえないような気が致します。

そういう意味からも、松尾芭蕉師は俳諧の大改革者だったわけです。そして今、それが、俳句の世界ではごく当たり前になっています。芭蕉師がいた時代から、300年以上も経った現代社会に生きている我々が、「古池や 蛙飛びこむ 水のおと」を、何の疑問も持たずにほのぼのと味わえるのは、時代が下って、当時あった俳諧の枠にはまった決まりごとや余計な先入観や常識に、とくにとらわれていないからだだと思います。

先月13日に柏崎で行われました、「ドナルド・キーン・センター柏崎」の開館1周年記念イベントで、キーン先生が会場の皆さんに、結論として大きな声で力強く投げかけたのは、「常識を疑いなさい！」です。このあたりは、江戸時代初期の芭蕉師と現代人のキーン先生の思いは、奇しくも完全に一致します。

ドナルド・キーン先生は、この「古池や 蛙飛びこむ 水のおと」を、次のように英訳をしています。お手元の資料をご覧ください。

キーン先生の訳では、Ancient pond – A frog jumps in The sound of water.

キーン先生の英訳では「古池や」の部分が、ありがちな Old pond ではなくて、どこことなく、古い歴史的な趣を感じるような Ancient pond としているところに、私個人としては奥ゆかしさを感じています。

ほんの参考までに、小林一茶のカエルの句も紹介してあります。添えてある英訳は、長野県信濃町にある小林一茶記念館で仕入れたものです。この英訳が誰によるものであるかは、館内には示されていませんでした。

「やせ蛙 負けるな一茶 これにあり」、Thin frog Don't be beat lssa is here!

「ゆうぜんとして 山を見る 蛙かな」、Serene and the mountain viewing frog.

このように、一茶の名句も私どもの心に訴えるものがありますが、そこには一茶の目に見える現実の風景が、主に詠まれているように思います。皆さんはどうお感じでしょうか。

さて、前例のない古い俳諧の慣例を打ち破った、斬新な「古池や」の名句が作られたその3年後に、芭蕉師は思い立って、当時はまだ辺境の地でしかなかった陸奥（みちのく）へと旅立つのです。



### 第3章 「おくのほそ道」について

第3章「おくのほそ道」について…。松尾芭蕉師が、門弟の河合曾良を伴って「おくのほそ道紀行」に旅立ったのは、旧暦3月27日、現在の暦では気候のいい5月16日です。今から325年も昔のことになりますから、現在のように道路が格段に整備されて、交通機関が発達しているのとは、全く状況が違っているわけです。不審な旅人の出入りを改める関所があり、山中では持ち物ばかりか命まで奪う追剥（おいはぎ）が出たりしていました。ですから、江戸時代の旅というものはとんでもなく難儀なことであり、また、事実上、命がけでもありました。このあたりを、我々は時空を超えて、現代社会とは全く別な物差しや思考回路で想像しながら捉えないと、「おくのほそ道」の本当のところには近づけません。

芭蕉翁（おう）、すなわち「おじいさん」という意味の「翁」とも称され、残されている肖像画では随分老けて見えますが、当時の芭蕉師はまだ46歳でした。亡くなったのは、おくのほそ道紀行の5年後の51歳でした。亡くなるまでの5年間、紀行文「おくのほそ道」の記述内容や句に、何度も繰り返して推敲（すいこう）し、ずっと手を入れていたそうです。1990年代初めに、芭蕉師自らが推敲されたとする元本が大阪で発見されました。何か所にも上から紙を貼って、もとの記述や句を何度も書き換えています。キーン先生がこれを見ながら、実に満足そうに満面に微笑んでいる写真を見たことがあります。



さて、ここでどうしても知っておきたいことがあります。私も生徒や学生のころに、古文で「おくのほそ道」を習ったときには、芭蕉師が見聞きした事実がそのまま書いてあると、ずっと思っていました。きっと大半の皆さんもそう思っておられるでしょうし、明治・大正・昭和と、長年ずっとそう思われていたようです。ところが、江戸

時代にあったとされた同行の河合曾良による随行日記の存在が、昭和18年（1943年）に再発見され、「おくのほそ道」の記述とはだいぶ異なる箇所が、いくつもあることが分かりました。「まさか俳聖である芭蕉が嘘をつくはずがない」、「曾良の日記はでたらめだ」などと、当時は芭蕉研究家を交えて大騒ぎになったそうです。しかし、落ち着いてよく調べてみますと、曾良随行日記には、「事実がそのまま書いてある」という結論になりました。では、芭蕉師の書いた「おくのほそ道」の内容は、ほとんど嘘なのか、ということになります。そうではあ

りません。

いわゆる虚実が入り混じったものですから、文学作品、文芸作品としてはよくあることで、かえってごく当たり前だという捉え方をします。考えてみれば、小説とは単なる真に迫った大嘘でしかありません。しかし、見方を変えれば立派な文学作品というわけです。

人気作家の浅田次郎氏が、「小説家の極意は？」と問われて、「いかにうまく嘘をつけるかだ」と答えています。もしも皆さんのお近くに嘘つきな人がいたら、その人はもしかすると、長く世に残る小説を書ける人かもしれません。今日ご参加の皆さんの周囲で、どなたかが見え透いた嘘をついたら、「ひょっとしたら芥川賞か直木賞への道が開けるかも…」と、前向きに考えてもいいのかもしれない。

そういうわけで、「おくのほそ道」に出てくる内容は、全てが事実とはいえないけれども、歴史に残る文学作品である「紀行文」のまぎれもない一大傑作なのです。書かれてから 300 年以上経っても、ほとんどの日本人が「おくのほそ道」を知っているわけです。このことを頭に置いてさらにお話を進めていきましょう。

曾良随行日記によると、ふたりが実際に訪れたとき、日光では雨降りでした。ですから、「あらたうと 青葉若葉の 日の光」は、あくまでもフィクションの世界です。言い換えれば、芭蕉師が心で見た情景なのです。このあたりは、キーン先生の「著作全集第一巻」にも、はっきりと書いてあります。また、新潟県人として誇りすら感じる、「荒海や 佐渡によこたふ 天河」を詠んだとされる出雲崎でも、当日の朝は快晴だったけれども、夜半は雨模様だった、と曾良は随行日記で記しています。

「おくのほそ道」で最大のフィクションとされるのは、糸魚川を過ぎた越後のはずれの「市振の関」の記述です。ふたりの遊女との、色気すら漂わせるエピソードが描かれています。芭蕉師は、曾良に「遊女のことを書きつけておくように」とありますが、遊女がいたというような、そんなことは一言も曾良は書き残していません。

しかし、これがあってから、「おくのほそ道」には、「人と人とのつながりを色濃く描写する世界」にすんなりと入っていくのです。このあたりが、「フィクションかもしれないけれども、文学作品としての妙」ということができます。

「古池や」の句で俳諧の新境地を開眼した芭蕉師ですが、生活としては点取り俳句の宗匠として、たびたび句会を主催していました。自分の句を評価してもらっていた俳諧をする参加者からは、しかるべき謝礼もあったわけです。そのまま江戸で俳諧宗匠の生活をしていれば、生涯にわたってけっこう安楽な暮らしもできたはずです。

「古池や」の句で新境地の俳諧のあり方に目覚めた芭蕉師は、住まいも欲も自分の名声も何もかも捨てて、何かに挑むように、あえて苦勞の多い、つらく厳しいだけの貧乏旅に出か

けるわけです。それはどうしてなのか。句の出来や不出来を、金銭感覚で評価して区別するような当時の点取り俳諧のあり方に大きな疑問を持ち、新境地の俳諧の改革者やその表現者としては、立ちはだかる壁のような精神的限界や、大きなフラストレーションを感じていたのではないのでしょうか。ただぬくぬくと恵まれた毎日の繰り返しからは、己が求める理想の俳諧精神は得られないと、直感的なインスピレーションを感じたのではないかと想像できます。

さらに、和歌でいくつも詠まれている陸奥（みちのく）の歌枕も確認したかったし、その500年ほど前に陸奥を旅した先人である歌人・西行法師や能因法師への尊敬の念と憧れもあったことも、「おくのほそ道」からは感じ取れます。

ちなみに、「おくのほそ道」の冒頭の一部では、そういった俳諧の先駆者としての抑えられないほどのやる気持ちは、如実に表れています。先ほど申しましたが、江戸時代では、長旅の出発に際しては場合によってはこの世の別れにもなるわけですから、家族や関係者や友人などとは「死」も覚悟した別れの儀式として、「水杯」を交わしたのです。「死」を意識するということは、失敗できない真剣そのものという、人間としての覚悟があるのです。芭蕉師と曾良はそれを表すかのように墨染めの衣をまとい、いわば修行僧のいでたちです。

著作権の関係もありまして、皆さんには資料として差し上げられないのですけれども、地図のようなものを個人的に持っておりますので、イメージを作ってもらうためにそれを回します。

ふたりは、江戸深川から日光、那須、須賀川、郡山を経て、辺境の陸奥（みちのく）へ向かいます。さらに山寺や出羽三山を経て、日本海側に出て酒田から象潟へ行き、もう一度南下して越後路へ…。さらに旅を続けて、終点となる美濃の国、今の岐阜県の大垣まで延べ600里、2,400kmも旅をしたわけです。

この距離は、おおよそですが、北海道の北端の宗谷岬から、沖縄の先島諸島、与那国島あたりまでの日本列島の長さに相当します。約5か月、150日間の長旅です。そのほとんどはつらい徒歩で、たまに馬や舟に乗って旅を続けます。持ち物は最小限で、門弟や縁のある者がいる所では句会を催したりして、そこで旅を続けるための費用を得ていたということです。

ちなみに、今回の文化講演会の案内に描かれている芭蕉と曾良の絵は、同じく俳諧で知られる与謝蕪村によるものです。これは京都国立博物館に所蔵されています。この与謝蕪村は、どちらかという、絵を描く世界のほうを生業（なりわい）としていた方です。

キーン先生は、著作全集第一巻の中で、「コロンビア大学で教える前の晩も読んだりするので、『おくのほそ道』をこれまでに少なくとも60回は読んだ」と書いています。もちろん、古文、現代語訳、ご自身の英訳もひっくるめての回数でしょう。昨年放映されたBSテレビ

放送では、現在 92 歳ですが、「100 回は読んだ」と語っていました。そういう私などは、古文、現代語訳、英訳で、細切れの読み方を足しても、せいぜい 10 回にも満たない 8 回くらいだろうと思います。キーン先生は、「おくのほそ道」を *The Narrow Road to Oku* と英訳しました。「これまで 4 回、『おくのほそ道』の全訳を手がけたけれども、まだ満足はしていない。少くくは原作に近づきたい。」と、昨年 2 月に、埼玉県草加市での俳人・黒田杏子（ももこ）さんとの対談で謙虚に語ったと、新潟日報が伝えていました。



## 第4章 「おくのほそ道」でとくに知られる名句から

第4章「おくのほそ道」で、特に知られる名句に入ります。

「おくのほそ道」は、次のように始まります。持病すら抱えていたのに、芭蕉師が命と俳諧人生をかけた、長くつらいはずの旅への並々ならぬ意気込みと抑えきれないほどの気持ちの高まりを読みますので、その雰囲気を味わってください。

「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老いをむかふる物は、日々旅して、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予も、いづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへて、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やゝ年も暮れ、春立る霞の空に、白川の関こえんと、そゞろ神の物につきて心くるはせ、道祖神の招きにあひて取もの手につかず、もゝ引の破をつゞり、笠の緒付けかえて、三里に灸するより、松島の月先心にかかりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、『草の戸も 住替る代ぞ ひなの家』面八句を庵の柱に懸置。」

ここにある「草の戸も 住替る代ぞ ひなの家」でも、研究者や専門家によってさまざまな解釈がなされますが、芭蕉師が住んでいたこの「草庵」が現実にあるもので、これから新しく住む人が来ると、きっと女の子がいて、「来年の春にはひな人形が飾られるかも…」というのは、いわゆる芭蕉師の想像の世界とみなされます。

「おくのほそ道」の世界に心奪われたキーン先生は、本気で松尾芭蕉師の境地に近づきたいと思ったとのことで、昭和30年、1955年5月に、実際に「おくのほそ道」を歩いてみようとして行動を起こします。しかし、すでに江戸時代にあった昔の道はなく、まだ舗装はされていなかった砂利道にはトラックなどが通るとほこりが舞い上がる、どうしようもない状況だったそうです。ちょうどいいところにあったはずの宿場も、もうありません。仕方なく、国鉄の汽車に乗っての旅になりました。このこともキーン先生の「著作全集第一巻」に書いてあります。

ちょうどその頃、実は私が生まれました。奇しくも、こうしてキーン先生と「おくのほそ道」にまつわるお話をしているわけですから、本当に不思議な気がします。また、私の誕生日の4日前には、「ドナルド・キーン・センター柏崎」館長で、その運営母体の「ブルボン吉田財団」の理事長・吉田康氏が生まれたのです。これには、運命的なものを感じざるを得ないのです。

さて、「ドナルド・キーン著作全集第一巻」には「永遠に残るもの」として、こんな一文があります。読んでみます。

「永遠に残るもの。芭蕉の『おくのほそ道』は、おそらく日本の古典文学の中でも一番愛

されている作品ではないかと思えます。一つには、日本には日記文学や旅日記の伝統が根強いからでしょう。日本人は、そういう旅日記を読むのが非常に好きなのです。しかし、もちろん、それだけではありません。芭蕉の作った俳句はたくさんありますが、その傑作の大部分は『おくのほそ道』の旅の間に作られたのだと私は思っています。もしだれか恐ろしい暴君が私に、芭蕉の俳句の中で一番いいものを選び。そうでないと殺すと言ったとすれば、私はやはり、『夏草や 兵(つはもの) どもが 夢の跡』の句を選ぶのではないかと思えます。」

キーン先生の感性では、「夏草や 兵(つはもの) どもが 夢の跡」が、最も心揺さぶった句なのです。それにしても、「もしだれか恐ろしい暴君が私に『芭蕉の俳句の中で一番いいものを選び、そうでないと殺す』…」という発想は、生粋の日本人にはありません。これはやはり、キーン先生は、元アメリカ人の感覚で書いている、という気がします。ですが、このあたりの違いが、我々にはなかなか興味深いのです。

キーン先生は、このようにも続けています。

「この句は、日本人の学者があまり指摘しないよさがあります。この句は、『o』という発音が非常に多いのです。例えばローマ字で『tsuwamonodomoga』と書くと『o』の音が多いことがよく分ります。洋の東西を問わず、詩人たちは『o』という音は哀しい音だと考えていました。アメリカ人の有名な詩人ポーは『o』を使って『*The Raven*』、『大鴉』という作品を書いています。音に関してはかえって敏感であった」

ということです。そう言われれば、否定を表す not とか Oh,no!とか、それも『o』ですね。英語辞書で O の項目を見ますと、実際にネガティブな単語が多いです。うちへ帰って、英語辞典をご覧になってみると分ります。

洞察力全開ともいえるこの分析というか考察というのは、英語を母語にするキーン先生が、世界に紹介しようと「夏草や」の句をローマ字表記してみたゆえの、思いがけない発見です。松尾芭蕉や「おくのほそ道」の日本人研究家には、到底思いもよらないことです。しかも芭蕉師は、自作の句が人の耳にはどう響くのかまでを、おそらく直感的に計算や工夫をしていたのだろう、ということです。さらに次の例をお聞きください。

「芭蕉は自分の俳句の音というものにとっても敏感だったと思われれます。もう一つ、山寺(立石寺)で作った句を例にあげましょう。『閑さや 岩にしみ入 蟬の声』、これを漢字混じりの文で書くとそうたいして面白い句ではないかもしれませんが、ローマ字で、『shizukasa ya iwa ni shimiiru semi no koe』と書くと、『i』の音が多いのに気が付きます。この『i』の音は、それ自体が蟬の音に似ています。芭蕉が蟬の声を聞いて、その音を自分の句の中に入れたのだろうと考えてもいいのではないかと私は思っています。」

ということです。確かに「iwa ni shimiiru semi no koe」の音の連続が、真夏に鳴く蟬の「み

一んみーん」に聞こえなくもありません。キーン先生ならではの音声による味わいかたを、皆さんはどうお感じになるでしょうか。キーン先生によるこのふたつの句の捉え方は、よくありがちな、頭だけで意味を正しく解釈したり理解したりするのではなくて、あくまでも五感をフルに使って自由に感じ取っている、と私には思えるのです。

また芭蕉師の境地でこの句を見てみると、「夏草や 兵(つはもの) どもが 夢の跡」では、「夏草や」の部分が、目の前に茂っている現実です。そして「兵どもが 夢の跡」とは、昔にあった「源義経が藤原泰衡に討たれた衣川での戦い」を心の中に描いているわけでしょう。また、「閑さや 岩にしみ入 蟬の声」では、にぎやかな蟬の声が現実聞こえてくるものです。「閑さや 岩にしみ入」は、心の世界です。しかし、うるさいほど蟬が鳴いているわけですから、実際には静かなはずはありません。しかし芭蕉師は、「閑さや」と詠んでいます。そして、大概の日本人の感性では、それでもなぜかあたりは森閑としていると思います。

考えてみれば、これは実に不思議です。この逆説を、皆さんはどうお思いになるでしょうか。「自然界の悠久の森羅万象の静けさ」、と思えます。さらに大きく捉えて、「壮大な宇宙の静けさだ」とみなす専門家もいます。こうしてみると、「閑さや 岩にしみ入 蟬の声」は、「古池や 蛙飛びこむ 水のおと」とかなり似ていて、このふたつの句の底に流れている「蕉風の精神」に、相通じるものが感じられると思います。

当初、芭蕉師と曾良は、山寺へ寄るつもりはありませんでした。しかし、地元の人からの強い勧めがあって立石寺まで行き、そのおかげで、まさに読む人の心に沁み入る名句が誕生したわけです。その後、梅雨に入って水かさが増して、流れが急になった最上川を舟で下ります。ここでも名句、「五月雨を あつめて早し 最上川」を詠みます。ご存じの方も多と思いますが、今の暦では7月も終わりということで、この「五月雨」とは、梅雨末期の豪雨を指すわけです。「おくのほそ道」をはじめ、古典文学を味わうには、旧暦と現代の暦との、1か月半ほどの時間差を頭に置かなければ、本当の季節感や情景がつかめません。

その後、聖地・出羽三山に詣でます。月山では山頂まで登って一夜を過ごし、「雲の峰 いくつ崩(くずれ)て 月の山」と詠んでいます。また、日本海側に面する酒田では、「暑き日を 海にいれたり 最上川」が生まれます。自然界の静けさ、太陽、月の情景から、まるで芭蕉師ならではの「壮大な宇宙観」が、どんどん展開していく気がします。

このあとには、おびただしい数の星の集合体である「天の川」が登場してきます。

## 第5章 「おくのほそ道」での「越後路」

第5章「おくのほそ道」での「越後路」に入ります。

いよいよ越後路の村上へと入っていきます。旧暦6月28日で、今の暦では梅雨明けの暑い8月に入っています。ここではさらに芭蕉師の目の前には、宇宙の一部、夜空に大きな「天の川」が広がるわけです。

その前に少し立ち寄りたいのが胎内市の乙宝寺です。見事な三重塔で知られますが、実はここでも芭蕉師は、句を詠んでいます。「うらやまし 浮世の北の 山桜」という句ですが、残念ながら「おくのほそ道」には収録されませんでした。その句碑も、乙宝寺にはあります。ですが、もうすっかり風化してしまっていて、刻まれている文字は読めません。この句の時期外れの山桜も、心で見た桜なのでしょう。

芭蕉師も曾良も、「おくのほそ道」にある句以外にたくさんの句を詠んで、方々にそれが残っているのです。実際に、芭蕉師が詠んだ松島での句もあるのです。「島々や 千々に砕きて 夏の海」という句を松島で詠んでいる、とされています。しかし、それに自分としてはあまり満足できなかったのでしょう。載せないほうがかえっていい、という判断だったと思われる。よく聞く、「松島や ああ松島や 松島や」というのは、後世に誰かが戯言(ざれごと)として作ったものです。



乙宝寺を少し下った築地というところから、芭蕉師と曾良は舟に乗って南下し、今の新潟市北区豊栄の福島潟あたりを通過して、阿賀野川に出ます。新潟に着いたのは旧暦7月2日で、今の暦では8月16日です。今から300年以上も前のことですから、当時は地形も今とはずいぶん違っていたのです。

NHN-B S放送で、当時の古地図を見たことがあるのですが、築地(ついで)あたりから阿賀野川あたりまでは、今ある水田は全てが潟のようになっている一大湿地帯でした。ですから、ふたりは舟で移動したのです。その周辺は、後年、新発田藩が大規模な干拓事業や新田開発を行って、現在では水田が広がっているわけです。

新潟に向かう途中、江南区江口の林徳寺に立ち寄って、「稲づまや かほのところが 薄(すすき)の穂」という句を詠んだとされます。その句碑はあるのですが、享和二年(1803年)の火事で、貴重な資料が焼失したということで、確かなことは分りません。お手元の資料を参考になさってください。

「おくのほそ道」では、芭蕉師は蒸し暑さに耐えかねて、持病も悪化したという理由で、越後の記述はほんの数行だけということで、情けないほど少ないのです。本当は越後でもいろいろなことがあったと、曾良随行日記には記されています。この長旅の後、5年間も推敲を重ねた結果だというのですから、あきらめるしか仕方がありません。しかし、名句「荒海や 佐渡によこたふ 天河」は、余計な記述がないぶん、かえって目立って特別な輝きを放っているような気がします。他県の人から、負け惜しみだと言われようが何といわれようが、余計なお世話です…。これでいいのではないかと思います。

ふたりは北国街道を歩き、新潟から角田山のふもとの伏部（ふすべ）に、芭蕉師が詠んだとされる句碑があります。それは「涼しさや すぐに野松の 枝のなり」。

この後、旧暦7月3日、今の8月17日に、越後一宮弥彦神社に詣で、次に山中にある西生寺に安置されてある弘智法印即身仏にお参りをします。これにゆかりのある古浄瑠璃「越後国柏崎 弘智法印御伝記」が、1962年に大英博物館で発見されました。それが、キーン先生の絶大なご支援によって、2009年6月、300年ぶりに柏崎でめでたく復活上演されました。

これがまさに、柏崎とキーン先生との出会いであり、「ドナルド・キーン・センター柏崎」が創設される、第一歩ともなったわけです。しかも、前回の上演が300年前といえ、奇しくもちょうど芭蕉師が活躍していたころです。

芭蕉師と曾良は、7月4日、今の8月18日に出雲崎に着きます。そこではあの名句が詠まれたとされます。「おくのほそ道」では、ふたつの句が収録されています。ひとつは、「文月や 六日も常の 夜には似ず」。英語でいえば、**The seventh month Even the six does not seem Like a usual night**。「明日の晩は、牽牛（けんぎゅう）と織女が1年に一度だけ会える七夕だけれども、六日の今夜だってなんだか落ち着かないなあ…」という、風流人ならではの、そわそわとした気持ちを表しています。

そして日本人なら誰もが知る名句、「荒海や 佐渡によこたふ 天河」を、キーン先生は次のように英訳しています。**Turbulent the sea – Across to Sado stretches The Milky Way**。英語の **Turbulent the sea** は、倒置法を使って、まさに荒れ狂う日本海の様子を表しています。**Across to Sado stretches** でも倒置がなされていて、海の上に細長く佐渡ヶ島のシルエットが浮かび上がるのを見てとれるようです。おしまいを、「天河」の英語を **The Milky Way** でうまく締めています。日本人は、まさに天空を流れる大河として、「天の川」を見ています。それを表す英語の **The Milky Way** というのは、「ミルクを流したような道」ということです。これは、もともとギリシャ神話からとされます。あるときゼウスの妻ヘラが、産着に包まれた赤ん坊ヘラクレスを見つけます。おっぱいを含ませようとしたら、その子が驚くほどの力で吸ったために思わず乳首が外れて、ヘラの母乳が夜の天空に壮大に飛び散ったといいます。

これが、日本人と西洋人の「天の川」の認識の違いなのです。多くの皆さんの意識では **The Milky Way** と聞けば、「不二家のミルキー」あたりを思い出すのではないかと思います。

先ほどご紹介したように、これを詠んだとされる出雲崎では、夜半は大雨だったと曾良は記しています。また、本当の7月7日の七夕では、今の直江津・今町に滞在していました。そこから、佐渡が横たわるようには見えないように思います。いずれにしろ、荒れ狂う日本海は、北国街道を歩く道中には必ず目に入ったはずで、そして、夜には無理にしても、昼間は遠くにかすかな佐渡の島影を見たのだらうと思います。夜半が雨降りだったという記録がありますから、「天の川」は芭蕉師が心の中で見た、美しい闇の中の天空の情景だったのだらうと思うのです。もしかすると、日没直後はまだ雲がかかかっていなくて、かろうじて「天の川」が見えていたのかもしれない。

なお、NHK-B S放送の「おくのほそ道」の番組によりますと、紀行文「銀河の序」、「本朝文選」という書物に、芭蕉師は出雲崎で見たという「天の川」が出る様子について書いているのです。このように、「おくのほそ道」には載せなかったけれども、旅先で印象が深かったことは、別の書物に反映されている事例も散見されるようです。七夕伝説の「牽牛と織女」に思いを寄せて詠まれたこの句も、芭蕉師の壮大な「宇宙観」を象徴するものです。

ところで、「牽牛と織女」は恋人ではなくて、もともと夫婦であったことはご存じでしょうか。あまりにも相思相愛だったためお互いの仕事を怠けてしまって、天の神が激怒して、ふたりを離れ離れにしてしまったのです。けっこう、恋人同士だと勘違いされているところがあります。



## 第6章 不易流行とかるみ

第6章「不易流行とかるみ」にいきます。

芭蕉師が、大自然の営み、特に宇宙の動きと壮大さに出会ったとされる立石寺から越後路にかけては、これまでにないインスピレーションを得て、新たな真理に達したとされます。それが「不易流行」です。「不易」とは、「ずっと永遠に変わらないもの」ということです。「流行」とは「常に移ろい変わりゆくもの」ということを言います。「宇宙の動きのあり方」なのだろうとも思います。朝日が昇り、時間が経てば夕日が沈んでいくといった繰り返しは、毎日のように変わらない。しかし一方で、少しずつ季節は移ろって変化していく。しかし、また決まって翌年、同じ季節が回ってきて、このサイクルに変化はない。世の中にしても人生にしても、永遠に変わらないものと絶えず変わりゆくものが、同時に存在して成り立っている。そういった心理が「不易流行」というものでしょう。

強いて言えば、苦勞した長旅から得た、芭蕉師なりの自然観、または人生観にも通じます。このことは、特に「おくのほそ道」では記してありませんが、ことあるごとに門弟に説いていたとされます。「不易流行」は、「おくのほそ道」の旅の行程で、太陽、月、星という大自然や宇宙と接することで、認識できたようなのです。もしも芭蕉師が、江戸に居たままで宗匠と呼ばれて奉られ、点取り俳諧をしながらほとんど不自由なく気軽に暮らしていたならば、まず達することがなかった心境と心理だということでしょう。

この後、越後の南端の市振の関から越中を経て、加賀の国を旅して金沢を通り、越前から美濃の国、大垣までの間には、親しい人との悲しい別れが幾重にも出てきます。同行を頼られた遊女との別れがあり、何年かぶりに会えると思って楽しみにしていた、親しい門下のつらい死を知ることにもなります。同行していた曾良や、旅の最後に同行した門弟「北枝（ほくし）」との別れもあります。人生のつらさという場面が、連続して描かれています。

そこから芭蕉師が達したのは、「かるみ」という境地です。親しい人とのつらい別れがあっても、いつまでもくよくよと慟哭（どうこく）の念にさいなまれていてはしようもない。「十分に悲しんだら、にっこりと笑って軽くやり過ごそう」という、いわば「プラス思考」の境地ともいえます。これも「おくのほそ道」の旅のあと、俳諧の席で芭蕉師が門弟に説いたものです。ただ、これに反発した門弟も中にはいた、という記述も残っています。

もうすっかり秋も深まり、「おくのほそ道」の終点である大垣では、次の句を詠んでいます。「蛤の ふたみにわかれ 行（ゆく）秋ぞ」。英語で言うと、Dividing like clam And shell I leave for Futami Autumn is passing by。添えましたキーン先生の英訳から分かるかもしれませんが、この後、芭蕉師は、伊勢の「二見浦」を訪ねることを楽しみにしていました。

土地の名物で、二枚貝の蛤の殻と二見浦の「ふたみ」を、言葉で絶妙にかけてあるわけです。このおしまいの句まではあまり紹介されませんが、なかなか名句ではないかと思っています。この「おくのほそ道」の旅では、苦勞の連続であったからこそ、松尾芭蕉師は自分の俳諧の新境地をものにし、300年以上経った今でも、私ども現代人の心をことあるごとに感動や感激で揺さぶっているのです。

その旅から5年後の10月12日に、芭蕉師は旅先の大阪で、51歳の生涯を閉じます。生涯最後の句は、「旅に病んで 夢は枯野を かけ廻る」です。旅に生き、その数々の苦勞の積み重ねから新境地を見い出して、それを忠実に実践する。また、俳諧人生では、絶対に安易な妥協などすることなく、常に進化し続けたい俳諧人として、精神的な壁にぶつかるさらさら新しい真理やインスピレーションを求めて旅に出る。芭蕉師の人生観そのものを映し出した、秀逸の句であろうと、読む人は誰しもがそう思うのではないのでしょうか。

300年以上前の松尾芭蕉師の生き方からは、現代人の我々が学ぶことがいくつもあります。私見ですが、誤解を恐れずに言えば、こういったことと正反対の、「ただぬくぬくと楽な生活だけを求めることが幸せだ」というような安易な風潮が、今の日本社会には常識的なこととしてあるようで気になっています。しかも、人生観を教えるべき肝心な教育の場で、それを推し進める事例もあります。あの3.11の大災害やいくつもの自然災害などにさいなまれてい

る今、人生のあり方は、「ただ安楽な生活だけが全てではない」、ということを考えてみたいと思います。



## まとめとして（「最終章」）

いよいよ、最終章の「まとめとして」に入りたいと思います。

松尾芭蕉師は、「古池や」の句によって、俳諧のそれまでの常識の壁を破りました。「おくのほそ道紀行」の約150日間、600里、2,400kmのつらい長旅から、俳句の境地をさらに深化させましたし、自身も進化しました。

ドナルド・キーン先生は、ことあるごとに「常識を疑いなさい！」と語っています。しかもご自身は、アメリカ生まれアメリカ育ちのいわゆる外国人でありながら、日本人のいかなる国文学者も、はるかに超える日本文学研究の偉大かつ膨大な業績を世に出し、御年92歳の今でも作品を創り続けておられます。そして、現在ではまぎれもない「キーン・ドナルド（鬼怒鳴門）」として、国籍も取得されました。これほどの「常識の壁破り」の事例は、ほかにはないだろうと思います。

松尾芭蕉師とドナルド・キーン先生は、見事に「常識の壁を破った」ことで、今後、何百年、何千年も人々に語り継がれていくことだろうと思います。それに対して、私は揺るぎない確信を持っています。

さらに、ドナルド・キーン先生は、日本が世界に誇る国文学の魅力を、全世界はもちろん、肝心な日本人と、これから続く日本の若い世代にも伝えたいと、真剣に願っています。それに併せて、キーン先生は、とりわけ日本の学校での古典の教え方には、よく「不安と不満と疑問」を口にされます。その根幹となる、「風情や風流や風雅を愛でる心」というものは、目には見えないものでしょう。でも、それこそが「国文学の魅力」につながることは、まぎれもない事実です。ぜひとも関係者にはもちろん、今日ここにご参加の皆さんにも、変わりゆく季節の自然の中に風情を感じ、風流心を持ったり育んだりしていただいて、ぜひそれを若い世代にも伝えてもらいたいと、私からもお願いしたいと思います。

締めくくりの一言になりますが、誰かがキーン先生に、「それにしてもご立派な業績の数々ですね」と申し上げると、にっこりして、「私はただ好きなことをしてきただけです」とおっしゃいます。どこまでも謙虚な方です。そういえば、これと同じことを、LEDの開発で今年のノーベル物理学賞の受賞が決まった赤崎勇さん（※1）が、マスメディアのインタビューでおっしゃっていました。芭蕉師、キーン先生、赤崎さんのように、「好きなことを納得いくまでとことんやること」は、ほかの人の目にはどんな大変そうな作業でも、さほどつらいということはないようです。どうもこのあたりに、後世に残る偉業を成し遂げる潜在的なヒントがありそうです。本来あるべき教育の、本当の姿と真の目的も浮かび上がってくるような気がします。いかがでしょう。

また、キーン先生はずっとお元気ですが、「何か特別な健康維持の秘訣でも？」と聞きますと、「まず嫌いな運動はしないこと、好きな食物だけをたくさん食べること…」と、にっこりとして答えられます。お医者様からは目を剥かれそうですけれども、これが 92 歳になられるキーン先生のおすすめのライフスタイルなのです。嫌なことをしないで好きなことをするので、ストレスがないのかもしれませんが、これがどなたにでも当てはまるとは思いませんが、どうぞご参考になさって頂きたいと思います。

キーン先生の自伝に、こういうことが書いてあるのです。これは 84 歳のときの本です。

「私は現在 84 歳である。昔であればめずらしい老齢とみなされたに違いないが、近ごろでは、特に日本の場合、ごく普通の年齢である。幸いにも私は滅多に病気をしたことがなく、2 回の短期間を除けば入院したこともない。自分の健康に悩むことはほとんどなくて、自らすすんで運動しようとする努力もなければ、バランスの取れた食事を心がけたこともない。日本の友人たちは、私が自分の血圧を知らないと言うとびっくりした顔で私を見つめる。医者が血圧の数字を教えてくれるようなときでも、それが喜んでいい数字なのか悲しむべき数字なのか私には分からない。不思議でならないのは、健康に細心の注意を払って長生きするためのあらゆる手立てを講じている人々よりも私が長生きしていることである。」

とおっしゃっています。

ドナルド・キーン先生が、これからもずっとお元気で、お好きな日本文学の魅力を私たちに伝え続けてくれますことを、皆さんと共に願いたいと思います。マララさん(※2)が最年少だったのであれば、キーン先生には、「最高齢のノーベル平和賞」もお似合いではないかと、個人的には思います。



長い時間、ありがとうございました。

(※1) 赤崎 勇さん(1929 年生まれ) : 2014 年ノーベル物理学賞の受賞者

(青色発光ダイオード[LED]の開発実績)

(※2) マララ・ユスフザイさん(1997 年生まれ) : 2014 年ノーベル平和賞の受賞者

(歴代最年少)

【巻末資料】

資料1 講演会レジュメ

資料2 配布資料「越佐芭蕉句碑を訪ねて」より

資料3 講演会の案内

## 資料1 講演会レジュメ

☆亀田図書館文化講演会・「俳句の味わい（『おくのほそ道』より）～ドナルド・キーンの視点をふまえて」  
講師：西沢 翔（ドナルド・キーン・センター柏崎ボランティアスタッフ） 2014.11.09（江南区文化ホール）

・第1章「ドナルド・キーン先生について」

・第2章「なぜ松尾芭蕉なのか？」

松尾宗房（むねふさ→そうぼう）〔貞門派〕 → 松尾桃青〔談林派〕 → 松尾芭蕉

・第3章「『おくのほそ道』について」

・第4章「『おくのほそ道』でとくに知られる名句から」

・第5章「『おくのほそ道』での『越後路』」

・第6章「不易流行とかるみ」

・最終章「まとめとして」

△資料▽

「古池や 蛙飛こむ 水のおと」

英訳: Ancient pond - A frog jumps in, The sound of water. [ドナルド・キーン英訳]

※小林一茶記念館より

・やせ蛙 負けるな一茶 これにあり …英訳: Thin frog, Don't be beat Issa is here!

・ゆうぜんとして山を見る 蛙かな …英訳: Serene and the mountain-viewing frog

☆「おくのほそ道」The Narrow Road to Oku [ドナルド・キーン英訳]

「おくのほそ道」冒頭

「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老いをむかふる物は、日々旅して、旅を栖(すま)か)とす。古人も多く旅に死せるあり。予も、いづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへて、去年(こぞ)の秋、江上(こうしょう)の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、やゝ年も暮、春立る霞の空に、白川の関こえんと、そとろ神の物につきて心くるはせ、道祖神の招きにあひて取もの手につかず、もゝ引の破(やぶれ)をつつり、笠の緒付けかえて、三里に灸すゆるより、松島の月先(まず)心にかかりて、住める方は人に譲り、杉風(さんふう)が別墅(べっしょ)に移るに、

草の戸も 住替る代ぞ ひなの家

面(おもて)八句を庵の柱に懸置(かけおく)。」

「夏草や 兵(つわもの)どもが 夢の跡」

(Natsukusaya tsuwamono domoga yume no ato)

英訳: The summer grasses - Of brave soldier's dream The aftermath

「閑さや 岩にしみ入(る) 蟬の声」

(Shizukasa ya iwa ni shimiiru semi no koe)

英訳: How still it is here - Stinging into the stones, The locusts' trill

・うらやまし 浮世の北の 山椒 [胎内市・乙宝寺]

・涼しさや すぐに野松の 枝のなり [西蒲区・角田山の麓]

「文月や 六日も常の 夜には似ず」

英訳: The seventh month - Even the six does not seem, Like a usual night

「荒海や 佐渡によこたふ 天河」

英訳: Turbulent the sea - Across to Sado stretches The Milky Way

「蛤の ふたみに別れ 行く秋ぞ」

英訳: Dividing like clam And shell, I leave for Futami Autumn is passing by

「旅に病(ん)で 夢は枯野を かけ廻る」 (芭蕉最後の句)

※参考

・うつくしや 障子の穴の 天の川 (一茶)

・五月雨や 大河を前に 家二軒 (蕉村)



「ドナルド・キーン・センター柏崎」常設展示図録より

それは1940年、  
タイムズスクエアの本屋だった。  
2冊の本が目にとまり、  
値段を見ると49セント。  
買い物だと思った。  
それが『源氏物語』だった。



「私が日本人になった理由：日本語に魅せられて」ドナルド・キーン（PHP 研究所）より  
※「ドナルド・キーン・センター柏崎」常設展示の年譜でも紹介



☆ドナルド・キーン先生の著作：「お勤めの書籍」

- ・「ドナルド・キーン自伝」（中公文庫）
- ・「日本との出会い」（中公文庫）
- ・「日本語の美」（中公文庫）
- ・「日本人の美意識」（中公文庫）
- ・「私の大事な場所」（中公文庫）
- ・「日本人と日本人文化（司馬遼太郎との対談集）」（中公文庫）
- ・「私が日本人になった理由：日本語に魅せられて」ドナルド・キーン（PHP 研究所）
- ・「果てしなく美しい日本」（講談社学術文庫）
- ・「ドナルド・キーン著作集」第一巻「日本の文学」（新潮社）
- ・「ドナルド・キーン著作集」第二巻「百代の過客・日記にみる日本人」（新潮社）
- ・「ドナルド・キーン・センター柏崎」常設展示図録（ブルボン吉田財団：編集・発行）

☆「おくのほそ道」関連の参考書籍

- ・「ドナルド・キーン訳：おくのほそ道」（講談社学術文庫）
- ・「おくのほそ道」全訳注：久富哲雄（講談社学術文庫）
- ・「おくのほそ道」萩原恭男校注（岩波文庫）
- ・100分で名著「おくのほそ道」長谷川 權著（NHK 出版）
- ・「おくのほそ道」（全）角川書店編（角川ソフィア文庫）
- ・新版「おくのほそ道」現代語訳（角川ソフィア文庫）

私の心を捉えた日本近世文学の二大巨星

# 松尾芭蕉

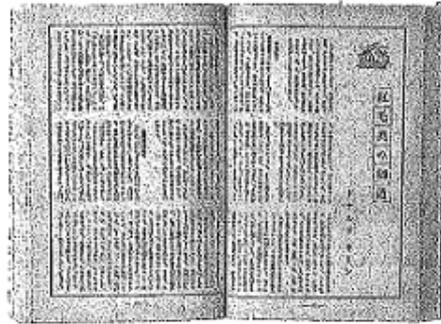
「六四四年生、一六九四年没

ドナルド・キーンが松尾芭蕉の「おくのほそ道」と初めて出会ったのは、コロンビア大学大学院で日本の近世文学を学んでいた一九四六年である。その美しい日本語に感動し、以来、芭蕉は永遠の研究テーマとなる。日本に留学して二年間、一九五五年に「おくのほそ道」を巡る旅に出、「松毛奥の細道」を「中央公論」(昭和三十年六月号)に掲載している。

芭蕉が愛用した柱は「国破れて山河あり、城塞にして草木深し」と書きました。平泉で芭蕉は柱の言葉を思い出しますが、山や川は永久に残るものではなく、音、草も木も必ずしも世の草と木ではありません。一番残るものは人間の言葉です。

「芭蕉に対する私の発見」より  
中央公論社  
「私の大文学の場」所収

山崎謙三  
『芭蕉伝』上・下巻  
出版：中央公論社 1951年  
1953年、日本に留学したドナルド・キーンは、芭蕉の研究に没頭する事を選択する。そのころ使用していた研究資料が東京帝国によるこの2冊。このときの芭蕉研究の成果が、"Anthology of Japanese Literature: From the Earliest Era to the Mid-nineteenth Century" (『日本文学選集』)に収められている。



中央公論社 1955年6月号所収論文  
ドナルド・キーン「芭蕉の細道」  
1955年、芭蕉のあとをたどって、江戸の湯・温泉・早稲・田舎などを巡り、芭蕉の道に歩いたドナルド・キーン。平泉で芭蕉が見た「松毛奥の細道」の風景を自分の目で見たことがその研究に反映したことが述べられている。



山崎謙三  
『芭蕉伝』上・下巻  
出版：中央公論社 1951年

初めて「おくのほそ道」を読んだ時、  
その美しい日本語に感動し、惚れたのです。

ドナルド・キーンは日本文学研究に「新たな視点」を振り入れ、評論を展開。芭蕉の俳句についても日本の国文学者が「俳句の音の大切さ」を見落としていたと指摘。

「漢字と仮名で表記すると分りにくいのだが、ローマ字で書くとうまく分かる。」  
"The Narrow Road to Oku" (The Narrow Road to Oku) という、音が七回出る。そして「い、い、い」という七回の「い」は、詩の音を表しているのだ。

「夏草や 共どもが 夢の跡」  
ここで重要な役割を果たすのは「O」である。どの国の詩歌でも「O」というのは発音の音なのだ。アメリカの詩人、ポー (POPE) は特に音の効果を重視した。彼の「大鷲」ではこの音が何回も出てくる。言葉の音とは別に音が人に訴えるのだ。

「芭蕉における呼吸と成詩」より  
『英文収録 おくのほそ道』所収  
橋本社学術文庫



山崎謙三、ドナルド・キーン訳、芭蕉の細道『The Narrow Road to Oku』  
出版：Kodansha International 1996年



④ 圓覚寺境内句碑 (新潟市江口)

稲づまやかほのところが薄の穂

異色の作品 「稲づま (薄穂)」は、薄葉、いなだまなどともいう。昔の薄葉が薄葉の内蔵にある正、負の地位の差によって火を放電が起きる。これが稲葉である。薄葉はそれともいかなものだが、稲葉はをいえば、稲葉の音と音白に稲葉の方が大気味である。

ところで、穂は夏の季節で、稲葉は秋の季節になっているのは、穂との関係があるからだ。文字通り「穂の葉」で、あの稲葉が穂を家らきるといわれ、昔から穂には稲葉が有り、稲葉によって穂が驚かすものと想つて、穂を家らせること考えられてきたからである。

稲葉には「稲葉」の句が五句ある。が、この句碑の句は、稲葉な作品であるから、あまり取りあげられていない。ほに稲葉のあまこの句の後は、小野介の稲葉は稲葉だといふ「秋風の吹くにつけともななるなめ (もも目が新い) 小野とはなら手稲まひけり」の句が載せられている。「たおやかな美人が舞っているのを見ているうちに、稲葉が舞ったのでよく見ると、それは稲葉(「しまれつてく)で、稲葉から穂の穂が出ておらした」というのである。昭和七年の元禄七年(一六九四)、巻稲葉大津子の作といふのが定説となつて

圓覚寺境内句碑(新潟市江口)の景  
稲に立つ稲葉。同じ句を載せられている



いる。  
寺土真家寂雪山林庵寺は、主善地大新築一巻田一内陸線まで、大湖に向かつてバス登江口から右手へ入ったところにある。新しい標をめぐらした際の山門をくぐると、本堂左側の参道を前に、右側に新築、左側に旧築の二塔が立つ。

稲葉住職の話によると、二百五十年前に建てられたのが、風化して読みにくくなったため、新潟市湖山の三原博(誠明)氏の希題により、昭和六十三年(一九八八)秋、同じ句を左側に再建、平成元年(一九八九)六月に除幕されたものという。稲葉が直書された御影石で、高を約五十センチ、幅約五十センチの字々なるもの。彫刻は深く彫られているので、はつきり読める。

幾年前葉が滞在した京都の海神寺に大仏住職稲葉も出入りしていただき、その縁で「おくのほろほ」の句が、稲葉寺に立つ寺の石塔の作が、昭和二年(一八〇三)の火災で一切の彫刻が消失してしまつた一と書誌にはある。なお新築の文字は、ほんまに稲葉にまつたもので、昔者は不明なことは稲葉住職の話。

浄願寺境内句碑 (新潟市別荘)

古池や蛙飛びむ水のをど

たまごまな解釈 小阿賀野川沿いを横町へ向け、朝野小学校からしばらく行った左側に、政宗本家の浄願寺がある。訪れた四月下旬は、「送り」帯ナシの花摘みの盛りだくさん。

浄願寺は、長禄年間(一四五七―一四五九年)に開山、武田信玄一族の出身、義浄宗の開教と伝えられている。元禄年間(一五七〇―一五七二年)に三千五百坪の寺域が設けられ、境内を庭園は江戸末期、有名な三冬義子の遺徳という。

庭園に招き入れられ、十八世青木翁草住僧に末葉より、つらまにいろいろ願くことができた。

「古池や」の句碑は、本堂から数分手前、欄干近くの茶室にある。石で囲まれた中に、「短答」句碑と並んで立つ。手前に小松が一本植えてあり、石

句碑には花立てが二玉散りてあつた。

郷土名家小堀雅天氏の「池邊集」によれば、江戸中頃ごろ、朝野の醫師青木貞庵が、芭蕉俳諧に傾注して句碑の建立を託詞。園内の一人を江戸に招き、芭蕉の真筆を入手、それを刻んだという(口説)。

高さ約三十センチ、幅約五十センチの自然石。芭蕉没後八十五年の享和八年(一七九七)の建立というから、境内では上野市の正徳寺に次ぐ古い句碑だ。二百二十余年の歳月を経ており、風化で読み取りにくい。中央から「古池や」とあり、左二行の分ちも書き。下段に「落月下着也」、右側に「千川 明秋 仙何 文成」。右側には、「園内 文左 某等 里松」と建立者の名が刻まれたようだ(小堀雅天氏)。

「古池や」は、いまや世評の「古池や」である。千人の人が読めば、千の経験が生まれる。だから「不思議な句」(斎藤孝「イイ・オロヨシ」)というところもある。

芭蕉は「新池や蛙とびこむ音もなし」の句を残している。芭蕉は、詩、歌、書において常にユーモアの少ない人だといわれる。この句も、おそろしく、さびしく、単なる詠れ句ではなく、それこそ大まじめな作であろう。芭蕉も素晴らしい自然も見ておもしろい。「から井戸く蛙とこむひらひらかな」(芭蕉)の句を真回転かきやださうな味がある。

芭蕉は「長編以信無此翁 長翁以後無此翁 芭蕉翁を芭蕉翁 使今古何出翁」と芭蕉を敬仰した。それは条件というよりも、芭蕉の芭蕉に對して、芭蕉に共鳴する芭蕉の世界を真にたしての崇拜ださうに思われる。

園内池を望むやうな浄願寺の句碑



「越佐芭蕉句碑を訪ねて」より

村山砂田男 著 新潟日報事業社 刊

著作権者許諾済

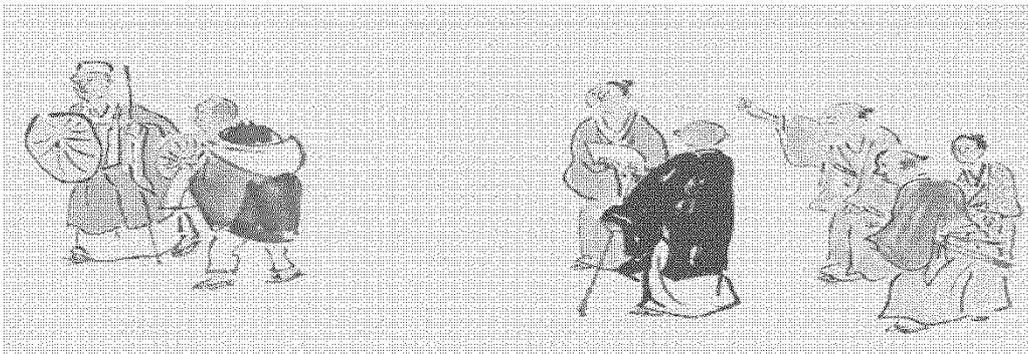
亀田図書館文化講演会

# 俳句の味わい (おくのほそ道より)

—ドナルド・キーン氏の視点をふまえて

にしざわ しょう  
講師: 西澤 翔さん

(「ドナルド・キーンセンター柏崎」ボランティアスタッフ)



与謝蕪村 作 「奥の細道画卷一旅立ち」

日時: 平成26年11月9日(日)

午後2時～

会場: 新潟市江南区文化会館多目的ルーム

入場: 無料

定員: 先着80名

申込み先: 新潟市役所コールセンター

025-243-4894

申込み開始: 平成26年9月28日(日)より

主催: 新潟市立亀田図書館 (問い合わせ 025-382-4696)

平成 26 年度亀田図書館文化講演会

「俳句の味わい（「おくのほそ道」より）」

～ドナルド・キーンの視点を踏まえて～

記録会記録集

監修者 西沢 翔

（「ドナルド・キーン・センター柏崎」ボランティアスタッフ）

編集・発行 新潟市立亀田図書館

新潟市江南区茅野山 3 丁目 1 番 1 4 号

電話 025-382-4696 F A X 025-381-8003

メールアドレス kameda.cl@city.niigata.lg.jp

「新潟市の図書館」ホームページアドレス <http://www.niigatacitylib.jp>